
生骸屍肉

呉武鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生骸屍肉

【Nコード】

N2688I

【作者名】

呉武鈴

【あらすじ】

普通に生きていたら足を踏み入れない裏社会。そこで起こる事件を専門にしている警察内の部署があった。その名も『捜査第零課』。これは『捜査第零課』配属の井波樟葉、そして相方である正体不明の『少年』の物語である。

兇命殺画 1（前書き）

これは『腐魂咀鬼』の続編です。これから読み始めてもいいですが、興味がある人は『腐魂咀鬼』も読んでみてください。

兇命殺画 1

殺害動画

「スナッフムービー!？」

とあるマンションの一室で妙齡の女性が同僚の男が持ち込んだ話に驚き、勢いで胸ぐらを掴み、前後に揺さぶっていた。

「そんな情報、どこから手に入れたのよ!？」

「とりあえず落ち着け!」

男は女性に落ち着くように言ったが動揺している女性の耳には入っても脳まで達していなかった。

「いいから答えなさい!」

「落ち着け樟葉。そのまま続けたらそいつムチウチになるぞ」

帰宅の言葉も無しに部屋に帰ってきた少年の冷静な指摘に井波樟葉は渋々男性の胸ぐらから手を離れた。
いなみくすは

「すまないな」

「礼を言うな。そんなこと言っている余裕があるならコイツに文句の一つぐらい垂れてろ」

「言えたらとつくに言ってるよ」

室内でも黒一色の帽子を被ったままの少年の皮肉に男は苦笑いをしながら言葉を返す。

「和宏くん、アタシに不平不満があるなら言っていいのよ」

いつの間にか男―島居和宏の背後に移動していた樟葉は顔だけ笑いながら男の頭を掴んでいた。
とりいかずひろ

「そつえばお前がここに来るなんて珍しいな。何のようだ？」

「実は変なタレコミがあつてな」

殺人動画

和宏の話を要約すると『匿名で警察にスナッフムービーをとっている場所のタレコミがあつたが誰一人信じなかったので相談を持ちかけた』との事だ。

「この話、信じるか？」

「うーん…」

真面目な顔の和宏に対し、腕を繰んで首を捻り唸っている樟葉はとうも真面目に考えてるように見えない。

「どう思う？」

樟葉に訊くのを諦めたのか和宏は少年の方を見た。

「信じるが…」

未だに帽子を外さずに窓際で日向ぼっこしていた少年は返事をするが歯切れが悪い。

「お前はどんなんだ？」

少年の視線は和弘の方に移った。帽子の下で光る紅い目はまるで値踏みしているようだった。

「信じなきゃそうだー」

「誰もそんなこと訊いてねえよ」

和弘の言葉を少年の否定の言葉が遮る。怪訝そうな顔をしている和弘を少年は見据える。

「お前はのことを前から知ってたんじゃないか？」「……」

和宏は答えない。しかし顔から表情が消えたのが答えだった。

「場所変えるか？」

「…ああ」

マンションから出て約7分歩いた所にある喫茶店に少年と和弘の姿があった。

「ブラックで」

「俺はチョコサンデー」

「待て！」

「どうした？」

「高いだろ」

「割り勘でどうだ？」

「手持ちはあるのか？」

「無いから樟葉に後で請求してくれ」

「アイツが払うと思うか？」

「愚問だな」

二人の問答は誰にも聞こえてない。やがてそれぞれの前に注文の品が届き、店員が下がったところで和宏が口を開いた。

「どうしてそう思った？」しかし少年は和宏より目の前にあるチヨコサンデーに気を取られていて和宏の方には視線を向けもしない。

「何の事だ？」

「とぼけるな！」

怒鳴るがチヨコサンデーを崩し始めていた少年のスプーンは止まらない。

「根拠なんてねえよ」

「は？」

和宏の方を一別すると少年はめんどくさそうに答える。返ってきた言葉に和宏は間抜けな声を上げた。

「カマをかけただけさ」

「…マジか？」

「ああマジだ」

思いがけない答えにうなだれる和宏を見て少年は笑う。

「もう少し上手く隠さねえとすぐにバレるぜ」

「…忠告ありがとう」

まだ立ち直れないのか和宏は顔を手で覆い隠している。その姿を見て少年の笑いは一段と大きくなった。

「さて、話を戻すか」

「それは俺が言うべき台詞じゃないか？」

「気にすんな」

「そうだな…何から話せばいい？」

「全てを要約して簡単に」

「…聞くのがめんどくさいだけだろ」

「御名答」

「分かったよ」

そのまま冷めて温くなったコーヒーを一口で飲み干すとしみじみと語り始めた。

兇命殺画 2

「俺が撮影を手伝い始めたのは―」

「んなこと聞きたくない」話を始めて数秒で少年は聞くことを拒絶した。

「いきなり話の腰を折るなっ」

「そんなこと聞いて誰が喜ぶんだよ」

「誰にも話す気はない」

「まあとにかく抜けるとことかその連中の情報を言え」

「…分かったよ」

「短めにな」

「…つまり俺は金の為にそいつらの手助けをしていた。そんな中俺は地方から配属された樟葉に会った。アイツはどんな時だって『自分の正義』に一直線だった」

「アパートじゃぐうたらしているとこしか見たことないけどな」

「そんなアイツを見て俺は気づいたんだ。『ああ―』」

「『あんなダメ人間に関わっちゃいけないな』ってか？」

「…いちいち変な事を言わないでくれるか？」

和宏は少年を睨むが少年はわざと視線を反らし目の前のパフェを食していた。

「戻すが『ああ…俺は何をしてんだ』ってね」

「犯罪者の手助け」

「…忘れかけていた事を思い出した。国民を助けるとゆう目的を」

「忘れる程度の志じゃなあ」

「殴るぞ」

「殺すぞ」

店内で殺気だつ両者の雰囲気に入ってきた若いカップルはたじろぎいそいそと帰って行った。

「とにかくだ、樟葉のおかげで俺は足を洗えた」

「良く生きてられたな」

「身元とか全部偽名使ってたからな」

「保険を使ってたってか、藤堂修^{ふじどうおさむ}」少年がその名を言った瞬間和宏は鳩が豆鉄砲くらったような顔をしたが、すぐに軽く笑う。

「今更驚かんが何でしってたんだ？」

「秘密だ」

二人がマンションに帰って来ると樟葉が玄関で腕組みしながら待っていた。

「アンタ達何処行ってたのよ？」

「アイス買いに言ってた」「へえ〜…じゃあ何で手ぶらなの？」

「コイツがその場でさっさと食べちゃまった」

少年は横にいる和宏を指差しながら言った。

（合わせろよ）

（任せとけ）

二人は樟葉にバレないように一瞬でアイコンタクトを交した。

準備を整えた一行はすぐに行動に移さず問題の倉庫に行ってからどうやって侵入し証拠を手に入れるか討論していた。

「だから夜遅くにこっそり入っちゃえばいいのよ」

「アホかつ。夜はアイツラが活動してる時間だ」

「その場でそいつらと証拠を同時に手に入れられるのよ」

「リスクが大きすぎるだろうが！！」

「かといって朝は鍵ぐらい掛けてんじゃねえか？」

「そうだが…」

「じゃあ明日の11:00に現地集合ね」

「場所しってたのか？」

「知らない」

「じゃあその時間にここに集合でどうだ？」

『了解』

そこは見渡す限りの錆び付いたコンテナばかり置いてある寂れた倉庫街だった。「どの倉庫？」

「第2倉庫だ」

その中に樟葉たち一行はいた。それぞれが上下服は闇に紛れやすいように黒基調にしており腰のポーチには拳銃、警棒、カメラなどが入っている。しかし少年だけは黒一色の帽子を被っている。

「アレはどうする？」

少年が指差した先に本来とはかけ離れた色に髪を染めている見張りに雇われたのであろう少年が5、6人たむろしていた。

「ヤツちまつか」

「たとえ社会のお荷物だろうができそこないの屑野郎だろうと簡単にやるとか酷いこと言わないの」

「お前も充分酷いな」

カランカラン

「あ？」

曲がり角の向こうで空き缶が落ちたような音がした。その音に気付いた少年達はアイコンタクトをし、頷いた。

「テメエ見てこいよ」リーダーであろう髪を赤に染めた少年がボウズ頭の少年に指図をする。

ボウズ頭の少年が角の向こうに消えた瞬間

バキッ

「がつ！？」

少年達の後ろで何かが砕ける音と呻き声が短く響いた。

「あつ？」

少年達が振り向いた先には倒れたまま動かない仲間の姿があった。

「どうした！？」

長髪の少年が仲間近づくが、刹那に何かに吹っ飛ばされる。

「なっ…?」

「グフッ!？」

更には角からボウズ頭の少年が鼻血を吹き出しながら吹っ飛ばされている。

「……」

急な出来事に半ば呆然としている少年達は後ろから強烈な一撃を後頭部に喰らい意識を落とす。

倒れた少年の後ろには樟葉と少年が立っていた。

「意外に簡単に終わったねえ」

「馬鹿で助かったな」

曲がり角の向こうから和宏が姿を表す。服には赤い液体が付着している。

「こつちに二人来てたらどうするつもりだったんだよ」

「アンタならチンピラ4〜5人に囲まれたって勝てるでしょ」

「イッテエ……」

やがて長髪が目を醒ましたので尋問したが倉庫の内部と一味については全くしらなかった。

兇命殺画 3

倉庫の中はところどころ蛍光灯があるだけで薄暗かった。そのうえ通路には荷物が散乱しており歩きにくくなっていた。

「もうちょい来客する人のことを考えて欲しいわ」

「誰が好き好んでこんなとこにくんだよ」

そんなところを少年・樟葉・和宏の順に縦に並んで歩いていた。

「この先の分かれ道を右な」

「へいへい」

和宏のナビでどんどん奥に進んで行く。

侵入してから約5分後

「…臭うな」

少年の言葉に樟葉と和宏は微かに臭う鉄の臭いに気付いた。

「…」

「ここか？」

黙る二人を無視し、少年は目の前にある扉を指差した。

「…あ、ああ」

和宏が返事をする躊躇もなく扉を開けた。

そこには手術用のベッドとその上に横たわっている死にかけの少女がいた。さらにその横には血に染まった手術道具と録画用であろうカメラが設置されていた。「…ひどい」

思わず顔を背ける。と視界の端に少年の頭に拳銃で狙いをつけている男がいた。

パンパンッ

短い音をたてて和宏の放った二発の凶弾が目の前の少年の頭を撃ち抜いた。

「…え？」

「まったくよく分からんガキだったな」

いつもと全く変わらないふてぶてしい口調で言う。

「和宏…どう…して…」

樟葉の問いに和宏は不適に笑った。

「見ての通りだ。あとそれ偽名な。本当は修、藤堂修だ」

和宏が「藤堂修が言い終わると大体同じタイミングで屈強な男達が扉から入ってくる。

「大切な商品だ。丁重に扱えよ」

藤堂に言われて男の一人が樟葉の首筋にスタンガンを押し付ける。

「そのガキはどうします？」

「ん？ああ海にでも投げ込んでけ」

「…ん」

「やっと目を醒ましたか」「かず…ひろ？」

樟葉は先程まで死にかけの少女が横たわっていたベッドに下着一枚着けずに四肢を固定されていた。さっきまで着ていた黒の上下を脱ぎ代わりに一目で値が張ると分かるスーツを着こなした藤堂はそれを覗きこんでいる。さらにその後ろには先程の屈強な男達が立っている。

「だから俺の名は藤堂修だってさっき言っただろ」

藤堂は上着のポケットからタバコを取り出すと口に銜えた。

「おいテメエらちよいと外しな」

「へい」

倉庫の前で見張りをしていた男達はそれを見つけた途端意識を失いそのまま消滅した。

「『なんでアンタがコイツラを仕切ってるの』ってツラしてんな。

いいぜ冥土の土産に教えてやるぜ」

それは鍵の掛けられた倉庫に入るための扉を力任せに開けた。

「俺の言ったタレコミ、ありや嘘だ。真実は依頼主から新たに『若い女のスナッフムービー』ってきてな、それでお前に白羽の矢が立つたんだよ」

それは道なりに倉庫の中を歩いていった。途中で男と出会っては腕を横に振るい頭と胴体を、上半身と下半身を分離させていく。

「そうさ俺にとっちゃ警察なんて隠れ蓑に過ぎないんだよ」

男がそれを後ろから撃つが倒れない。それはゆっくりと振り返る。紅い目が男を捉える。男は恐怖の果てに逃げようとするが後ろから頭を掴まれそのまま肉塊と成り果てた。

「さて俺はこれでも人間だ。最後に願いを一つだけ聞いてやろう」

「じゃあ唄っていい？」

「一曲だけならな」

「あんがと」

樟葉は大きく息を吸い込むと透き通った声で唄い始める。

とおりゃんせ

とおりゃんせ

ここは何処の細道じゃ？

鬼人様の細道じゃ

ちいいとおしてくだしゃんせ

御用の無い者とおしゃせんこの子の七つの御祝いに

御札を納めに参ります
行きは良い良い
帰りはコワイ

グシャ！

最後の一章節と同時に藤堂の後ろの扉が決じ開けられた。

「コワイながらも、とおりゃんせとおりゃんせ」

そこには目の位置に紅い二つの光がついている黒一色の顔とバツク
リと裂けた口、そして米噛みあたりから羊の角を生やしている異形
のものが純粹な恐怖を抱かせる声を響かせ唄いながら入ってきた。

「な…なんだデメエ！？」

藤堂は咄嗟に拳銃をつきつけるがそれは動じない。

「遅かったじゃん」

ベッドに寝かされたまま樟葉が笑う。

「お前はもう少しスタボロになってるほうが似合ってるぜ」
嫌味たらしく言うともれも笑いだす。

「お前はまさか…いやあんととき俺に頭を撃ち抜かれたはずだ！！」

「あん？俺があんな玩具で死ぬと思ってるのか？はっ、こりゃ傑作
だ」

そう言うともれは一步前に入る。

「ひっ！？」

藤堂は無意識に一步下がる。一步また一步と距離を詰めるそれに対
し藤堂は一步また一步と距離をとろうと下がっていく。やがて藤堂
は壁に背がついた。

「因果応報って言葉を知ってるか？」

それが言い終わると同時に藤堂は意識を失った。

「…ん」

「意外と早いな」

藤堂はさっきまで樟葉が寝かされていたベッドに四肢を固定されていた。藤堂の目の前にはその顔がある。その後ろには服を着た樟葉が眠たそうに欠伸をしていた。

「さて今からお前には今までにやってきたことを数分に凝縮して味わえさせてやるよ。樟葉、部屋から出てろ」

「了解」

素直に樟葉が部屋を出て扉を閉めると同時にそれは藤堂の右足を折った。

「……っ！」

「次は何処がいい？」

嬉しそうにそれは手を動かす。そしてそのまま藤堂の左腕を潰した。

「……っ！？……！！」

「そんなに喚くな」

さらにそれは左足の膝から下を引き千切った。

「ガアアアアッ！？」

「さて最後は右手だ」

「待つ、待て！！」

「ああ？」「と、取引をしよう！俺を解放してくれたらたんまりと金をやる！そ、それでどうだ！？」

「ダメだね」

それは男の提案をあつさり一蹴した。そしてそれは右手を掴むと力任せに振りきる。刹那筋肉が千切れる音と骨が砕ける音が部屋に響く。

「アアアアアアア！？」

「次は腸だ」
はらわた

鋭い爪で腹を裂き胃、肝臓、脾臓、小腸、十二指腸、大腸とむしり取る。

「最後に冥土の土産に俺の名を教えてやるよ。まあ樟葉がつけたんだがな」

それは既に意識が失いかけている藤堂の頭を右手で掴むと紅い口を
目一杯裂き笑いながら

フリウイデーニ

「привидениеって言うんだよ」右手に掴んでいるモノを
軽く握り潰した。握り潰されたモノは紅と灰色、そしてピンク色の
液体を周囲に巻き散らした。

兇命殺画 4

「終わった？」

少年が部屋の外にでると樟葉が扉のすぐ横にもたれながら座っていた。

「見て確かめるか？」

「どうせアンタのことだから原形留めてないでしょ？そんなの見たくないわよ」

そう言いながら樟葉は外に出るために歩きだす。少年もそれ以上何も言わずについていく。時折頭が無かったり上半身と下半身が別れた死体を見たりしたが樟葉は何も言わない。それから数分して二人は外に出た。時計を見れば侵入してから二時間も経っていない。

「お腹空いたわね…コンビニ弁当でいい？」

「俺に拒否権はない。お前の決定なら俺は何にだって従う。それが『契約』のはずだが？」

「アンタが嫌なら来なくてもいいのよ？」

嫌味たっぷりに樟葉が笑いながら言つと少年も笑いながら言い返す。
「嫌だったら俺は今頃自由の身だよ」

沈黙唄 1

久しぶりに自分の部署に顔を出す事にした樟葉は言い訳を考えながら署内を歩いていた。

「風邪をひいてた…いや生理が止まらなかったは…ダメね。あとは――」

「何ブツブツ呟いてんだ？」

「どんな言い訳なら通用するかなってアンタ何で隣歩いてんのよ」地下に続く階段を降っている樟葉の隣をいつの間にか歩いている30代前半の男に敵意丸出しで睨みつける。といっても身長差は軽く20cmはあるので見上げるの方があっている。

「そりゃ俺も出勤途中だからだ」

どこから取り出したのか缶コーヒーを手の中で回している男は樟葉と同じ捜査第零課に配属されている。

「どんな言い訳なら通用すると思う？」

「あの人なら気にしないだろ」

「それもそうね」

飲み干したコーヒー缶を握り潰しポケットの中に押し込みながら言う男を横目で見ながら煙草を取り出し吸い始める。

「署内は禁煙だが？」

「何を今更。ここは特別区域よ」

「俺にもくれよ」

「勿体無いからダメ」

捜査第零課

それは秘密裏で行動している特殊な捜査課。主に一般には公表出来ない事件を未然に防いだり捜査をしたり解決したりする。しかし必然的に事件の数は少ないため連日休日と同じである。

「おはよーございまーす」「久しぶりだな樟葉！」

気のない挨拶で入ってった樟葉とは対称に元気のいい老年の男の声
が部屋に響く。

「相変わらず元気ねえ」

「逆にお前は若いのにだれておるな。シャツとせんか！」

「そうは言っけどリュウ爺に勝てる若者は少ないと思うけど…」

「買い被りすぎだ。しかし二週間も何しとったんだ？」

「サボってました」

言い訳も無しに堂々と言う樟葉を老人は睨むがすぐに笑いだし

「サボりも程々にしとけよ」

と許してしまった。

「課長もう少しボリウム下げてもらえませんか？」

その隣の机で書類を整理していた眼鏡の青年が課長を見ながら文句
を垂れた。

「悪いがこれ以上は下げれんな」

そんな一言で青年を退けた老人こそこの捜査第零課課長・笠羽劉玄

笠羽りゅうげん

である。性格は豪快の一言につき、年老いてはいるが2mを超える
身長・ガッチリした身体・100mを12秒で走る身体能力をもつ
ている。唯一歳相応なところと言えは（しつかりと生えている）髪
の毛が全て白髪であることぐらいだ。「増田、課長にそんなこと言
つても立て板に水ってことぐらい分かってんだろ」

増田と呼ばれた青年は書類から目を上げ樟葉の隣にいる男―日比野

ひびの

兼次けんじを見る。「分かってても気になるんですよ」

増田は本来大学生程の歳だがこの部署に歳は関係ないらしくある事
件をきっかけに配属された。パソコンを使いこなしあらゆるところ
から事件を拾ってくる役割をしているが席が笠羽の隣にあるためス
トレスにより胃潰瘍になったこともある。

「あれ？ミクさんはいないの？」

樟葉が部屋を見渡しながら自分の机に付くといつもならいる根岸ミ
クの机が空いていることに気づき声にだすと、劉玄が「ああ」と声

を出す。

「ミクの奴なら宿直室で仮眠をとっとるわ」

「そうですか」

「つまんなそうだな」

日比野が隣で自分用の冷蔵庫からさつきと同じ銘柄の缶コーヒーを取り出しながら言う。樟葉はつまんなさそうに「ええ」と言う。机の上にだれた。

「ミクさんがいないと癒されない」

ガチャ

「あゝ、おはようございます」

日比野が缶コーヒーを三本飲み終えた時、劉玄の後ろにある宿直室から間のびした声を出しながら根岸ミクが姿を現した。微妙に着崩れた服装は妙な色気を醸し出しているが皆既に見慣れているため何とも思っていない。まだ眠いようで細い目がさらに細くなり開けてないように見える。

「ミクさんおはよー」

「樟葉さんおはようございます」

「とりあえず目を覚ませ」そう言いながら日比野が「ほれっ」と缶コーヒーに放るがミクはそれを取り損ねた。

「…えへへ」

「『えへへ』じゃないですよ」

文句を垂れながら落ちた缶コーヒーを拾いミクに手渡す。

「ありがと。お礼にハグしてあげるね」

未だに寝惚けているのかそんなことを言いながら増田を捕まえようとするが増田は地を蹴って椅子ごと下がり突撃に近い勢いで突っ込んできたミクを避ける。そのまま勢い余って顔面からコケるが何事もなかったかのようにすぐに立ち上がり缶コーヒーを開けると一気に飲み干した。

「浪誠教とゆうのを知っておるか？」それぞれが暇潰しをしているなか突然劉玄はその場にいた全員に尋ねた。

「えっと……たしか最近話題の新興宗教ですよ」

「何でも一度諦めた夢を叶えるとか……なんとか」

「うむ」

「でもそれがどうしたんだ？」

「近頃起きてるの失踪事件の方も知ってるな」

「勿論、何でも失踪者に共通点が全くないかよ」 「実は公開されてないだけであるのだよ」

「……まさか」

「察しがいいな日比野よ」「どうゆうことよ？」

「お前はもう少し頭を使え。それは飾りか？」

「アタシにケンカ売ってんの？」

「樟葉、後で幾らでも相手してやるよ。で課長も樟葉にも分かるように言ってください」

「うむ。その共通点とゆうのは全員が浪誠教に入信しておったのだ」

沈黙頌賛 2

劉玄の話が終わりそれぞれが準備に取り掛かるが増田だけがコンビに昼飯を買いに行った。その内劉玄が内電によって署長に呼び出され渋々出ていった。さらに数分後に劉玄が出ていったことにより静かになった部署に増田が戻ってきて昼飯も食べずに眠り始めた。

「何でこいつ寝てんのよ。ほれ、起きろ」

そんなことを言いながら頬をつつき始めるが起きる気配はない。

「疲れてんだからやめとけ」

「あによー！何でかばうのよ！？」

「お前と違ってここ最近調べモンばっかしてろくに寝てねえんだから」

「んなもん知るか！」

「知つとけ」

「まあまあ樟葉ちゃん。そうだゝ久しぶりに組み手しない？」

「いいわ！」

「お手柔らかにね」

笑いながら（樟葉は肉食獣のように、ミクは心が全く読めない微笑みで）二人は隣にある道場に行った。

「やつとうるさいのが消えてくれましたね」

二人が出て行った直後に増田は上半身を起こし、ぼやいた。

「なんだ、狸寝入りか」

「気づいてたくせに」

「いんや気づかんかった」「白々しいですね」

増田にとって日比野は先日行方が分からなくなった鳥居和宏を除けば捜査第零課の中で一番得体の知れない人間であり、一番信用していない人間であった。

「どうした俺の顔をジロジロ見て。悪いが俺にはそうゆう趣味はないぞ」

「俺にもないですよ」

そう言うと増田は買ってきたパンの封を開けながらパソコンを起動し仕事に戻った。日比野も邪魔にならないように自分の机に戻り今日何本目か分からない缶コーヒーを飲み始めた。

「でりやああああ!!」

「危ない危ない」

一方隣の部屋では二人とも隅に畳んである胴着に着替えず普段着のまま組み手をしていた。樟葉が一方的に攻めたてるがミクは全く表情を崩さずに全て避ける、もしくは受け流していた。

「うりやつ!」

ようやくミクの腕を掴み自分に引き寄せそのまま一本背負いの要領で投げ飛ばす。

「うんしょ」

しかしミクは空中で体勢を整え背中から落ちずにしっかりと両足で着地した。

「もらったっ!」

「…え!?!」

しかし着地されることを予想してたのか樟葉は投げた勢いを殺さずに突っ込む。着地した瞬間なので動くのが遅れたミクは避けられずに樟葉の体当たりをくらいそのままマウントポジションをとられた。樟葉が顔を殴るために腕を振り上げ、顔を殴られないように両手で守るが樟葉に動きはない。やがて樟葉の顔から汗がミクの腕に垂れる。

「…ふう」

「…はあ」

それによって二人の緊張は解けて同時に一息つく。ゆっくりと樟葉がマウントポジションを解き、ミクが立ち上がる。

「まさかあのまま突っ込んでくるとは思わなかったよ」

「先読みと虚をついてこそ女性の闘い方よ」

「その割には直線的な攻撃が多いよね」

「そ、その後の攻撃を読ませないためよ」

「結構遅いし」

「うぐっ！」

「分かりやすいよね」

「ミクさんその言葉はグサツとくるよ」

「でも、事実だし」

「軽くへこむよ…」

「…暇だな」

その頃黒一色の帽子を被った少年は警察署の屋上で日向ぼっこをしていた。手には炒った豆の入った袋が、すぐ近くに蓋の開けられていない500mlペットボトルが置かれている。

「つまんねえなあ」

「チュンチュン」

「…うるせえなあ」

周りに数羽の雀が屋上に撒かれた炒った豆につられてやってきた。

少年が豆を食べながらそれを横目で見ると雀達は一瞬痙攣した後に倒れて動かなくなる。

「…持って帰って焼いて食うか」

沈黙頌賛 3

シリシリ

時計の針が17:00を過ぎ職務をマトモにやらずにそれぞれが帰ろうとした時、劉玄の机にある黒電話がなった。

『……』

劉玄がいない今、誰かが出なければならない。だが誰もが黒電話の方には行かない。それどころか距離をとろうとし始めた。

「……誰が出るよ」

「俺はイヤですよ」

「私も」

「同じく、てかそう思うなら出てよ」

「俺は『誰か』に出てほしいんだよ」

『……』

みんな黙りそれぞれを見渡す。

「よし。ジャンケンで決めよう」

「賛成」

「確かにそれなら平等ですよ」

「アタシは殴りあいの方がいいなあ」

「そんな不公平だろうが」

「いきますよ。最初はグー、ジャンケー」

ガチャ

「テメエら帰らねえのかよ」

日比野の提案によりジャンケンをしようとしたが、突然入ってきた少年によってその場にいた全員から『ジャンケンによって決める』という考えは消え去った。「丁度よかった!」

「あ？」

「お前さつさと出てくれよ」

「俺は部外者だ」

「立派な関係者だろうが」「出てくれませんか」

「ざけんな」

「お願い」

「断る」

「出る」

「はいはい」

樟葉の言葉にだけ渋々従った少年は他の人を無視して黒電話に向かう。

ガチャ

「なんのよー」

『さつさと出やがれこのクソジジイ！』

出た瞬間スピーカーでもないのに電話の相手の怒声が部屋中に響いた。

「……」

少年が顔をしかめながら振り向き『外に出てる』とジェスチャーで伝える。『了解』と樟葉が返し全員部屋から出した。

『聞いてんのかオイ！』

その間にも怒声は続く。少年は全員が部屋から出たのを確認すると息を大きく吸った。

「――」

そして電話の向こうの相手に対して人では理解出来ない言葉を部屋を揺るがすほどの音量で発した。

『っ！？』

電話の向こうで悶絶しているのが手にとるように分かっているのか数秒後にいつもの音量に戻し問いかける。

「落ち着いたか？」

『…なんだデメエか』

「俺じゃダメかよ」

『当たり前だ。俺はジジイに用があんだよ』

「悪いがアイツは居ねえよ」

『…チッ』

「伝言あるなら伝えてやるが？」

『いやいい』

「そうか。じゃあな」

そのまま受話器を置くと部屋を出るためにドアに向かって歩きだす。

次の日

「まさかお前が連続でくるなんて…槍でも降るんじゃないか？」

「後で道場来いや」

樟葉は本当ならサボるつもりだったが劉玄に『必ず明日07:00には来い』と言われ渋々来ていた。

「てかなんで俺まで呼ばれてんだよ」

さらに日課の散歩に出かけようとした少年も『ついでにお前も来い』と言われ仕方なくついてきていた。

「んなことリユウ爺に聞いてよ。てかミクさんは？」

「また仮眠室で爆睡中だ」それから時計の長針が半分ほど進んでから劉玄は捜査第零課に人が二人は入るであろう麻袋を担いで出勤してきた。

「呼び出した本人が遅れてくんじゃねえよ」

「すまんすまん。少しばかり戸惑ってしまっただけな」

「そう言いながら袋を放る。」「ー!？」

「キャッ!？」

その袋の中から二つ軽い悲鳴が上がる。

「快く引き受けてくれた協力者だ」

「そう言いながら指差す劉玄を樟葉はジト目で見る。

「だったらなんで拉致紛いなことしてんのよ」

「少しばかり強行手段をとらせてもらっただけじゃが」

「矛盾してますよ」

劉玄は日比野の言葉を右から左に流しながら袋の口を開ける。

「何のつもりだクソジジイ！」

開けられた瞬間、中から現れた若い男の拳が劉玄を捉え、2 m近い巨体を吹っ飛ばした。そのままデスクにぶつかり書類やらファイルやらが散らばる。その中には逃げ遅れた増田も巻き込まれていた。

「ご愁傷様」

「てかパソコンしつかり抱えてやがる」

「これは…俺の命…ですか…」

そうこうしているうちに男は書類の山に埋まりかけてる劉玄を踏むと襟元を乱暴に掴み顔を寄せる。

「何が『快く引き受けてくれた』だ！『抵抗したから無理矢理拉致』の間違いだろうが！拳句の果てに俺だけならまだしも雪奈まで巻き込むんじゃねえ！」

「き、亨さん、落ち着いて下さいっ」

亨と呼ばれた男と同じ袋から出てきた雪奈と呼ばれた給仕服メイド服を着た白髪の少女が必死に宥めようとする。

「しかしだな雪奈」

姿勢そのままで顔だけ振り向き不満そうに言う亨だがその顔には先程までの殺気はない。

「せめて用件ぐらい聞いてあげましょうよ…」

「…雪奈に感謝しろよ」

そういうと劉玄を解放し散乱した書類やらを片付け始めた。雪奈も手伝おうとしてしゃがんだが後ろから樟葉が覆い被さり倒されてしまった。

「雪ちゃんおひさー」

「お久しぶりです樟葉さん。あの…とりあえず退いてもらえないでしょうか？」

「イヤ」

雪奈の頼みに即答するとそのまま頬擦りを始める。

「キヤッ!？」

「ああゝか・わ・い・いゝ」

「亨さん……」

泣きそうな目でみるが亨は「仲良いなあ」と一言言っただけで片付けに集中してしまった。

沈霊唄賛 4

「よしクソジジイ話ってなんだ？」

20分後、元通りになった捜査第零課の片隅にある座敷（畳を数枚並べただけ）で劉玄に向かいあい雪奈が煎れたお茶を飲みながら部外者とは思えないほど態度のでかい亨が口を開いた。

「仕事だ」

「断る」

劉玄の言葉に即答した亨がちゃぶ台に湯飲みを置く。「先の短い老人の話ぐらい聞いたらどうだ」

「聞いてやるさ。だが俺は自分に得がないと動かないのさ」

「大丈夫じゃ。『捜査第零課』名義できっかり20はやるわい」

「相変わらずねえ」

その光景をみながら捜査第零課の一同は煎餅を食べていた。

「亨さんも大変ですよね」「まあ課長を前にして全く動じないのは流石『笠羽の血』とでも言うか…」

一同は思った事を口々にだすが少年だけ黙々と煎餅を食べていた。

「皆さんお茶がはいりました」

雪奈が盆に湯飲みを4つ載せて奥の給湯室から出てきた。

「亨さんは素直じゃありませんね」

「アイツのことは小学校の時から知ってるけどあん時からずっと変わっていないわよ」

劉玄と亨のやりとりを微笑ましく見る雪奈に樟葉が呆れながら言う。「はっ。たったそんだけかよ。最近の親バカの方がよっぽど裕福なんだな」

「はん、何を言っておる。20は前金じゃ」

「前金は受け取らない主義だ」

「よくそんなんでも成り立つとるな」

「『依頼は必ず達成』が俺の信念だからな」

「てことは俺の依頼は達成出来ないってことか」

「…ああ？」

その一言で亨から凄まじい殺気が発せられた。

「そうかそうか。所詮『出来損ない』か。うん、やはり俺らだけでどうにかしようか。とゆう訳じゃ。さっさと茶を飲んで帰れ」

バリント

劉玄の台詞が終わった直後、亨が湯飲みを握り潰した。「テメエ…」

殺気が部屋中に満たされ大して免疫のない増田の体が無意識に震え始める。馴れている樟葉達ですら痛いほど感じて身動きがとれない中で少年と劉玄だけが悠々とお茶をすすっている。湯飲みを片手に持ち、もう片方の手で『あっちいけ』と言わんばかりに振りながらとどめの一言をいった。

「どうした？飲み終わったのなら帰れ帰れ」

殺気の濃度が更に増し、空を震わし湯飲みの中のお茶に波を作る。

「…やってやるうじゃねえか」

「ハッハッハッ！この程度で乗せられるなぞ若い証拠じゃな！」

「チクシヨ…」

それから数分後には冷静になって座卓にうつ伏せる亨とそれを見て大笑いしながら煎餅を食う劉玄がいた。しかし先程までの殺気はなく後悔の念が亨の回りを漂っていた。

「それで内容じゃが…」

「おい樟葉。久しぶりに組み手しようぜ」

「今日こそ勝ってやるわ」劉玄が話を始めようとした直後に亨は樟葉を組み手に誘い速攻で逃げ出した。

「…本当にあんなんで探偵業は成り立つとるのか？」

「…なんとか」

劉玄の独り言に雪奈が苦笑しながら律儀に返答した。「私から伝えるときです」

「すまんなあ。小僧、樟葉にも伝えといってくれんか？」

「しょうがねえなあ」

渋々と言った

沈霊唄賛 5

「で、アタシ、ミクさん、アンタ、亨^{バカ}でそのナント力教に潜入調査すると」

「狼誠教な」

その夜、リビングで寝転がりながらバラエティ番組を見ている樟葉に少年は劉玄からの言付けを伝えていた。

「で、日時は？」

「明後日」

「ごめんパス」

「俺に言うな」

「じゃあ伝えて」

「自分でしろ」

本当に不満そうな表情をした樟葉が少年の方を見る。「だってその日は高校の同窓会なのよ」

「知らねえよ」

「そついやアンタ、何でそんなに乗り気なのよ」

「ああ？そうだなあ……」

そう言う少年は腕組みをして考えだした。

「何か良い予感がするんだよ」

数秒経って少年が言った言葉に樟葉は少し啞然とした表情で少年を見て、それから軽く笑いだした。怪訝そうな顔をしている少年に樟葉は告げる。

「アンタから“良い予感”なんて言葉が出るとは思わなかったわ」

「そうかよ」

「ところで…それなに？」

樟葉が指差した先にはさらに肉の塊がいくつか盛られていた。

「雀だ」

「…はい？」

「食つか？」

「…遠慮しとくわ」

―二日後―

朝の礼拝を終え、祈りの言葉を待つ人々の前に司祭と思われる奇妙な模様の書かれた修道服を着た長身痩躯の男が教祖様の代わりに立っていた。

「では皆さん。ここに新たな仲間を紹介しましょう」そう言いながら舞台袖の方を見る。それを合図に舞台袖から他の信者と同じ白いローブを羽織った四人の男女―捜査第零課の面々が出てきた。

「我等が主のお導きを受け俗世からの救済を望む者を此処に迎えま
す」

そこで言葉を切り、舞台の奥に飾ってある教祖様の肖像画に向かい両手を広げる。

「彼の者達に福音をつ！」それに合わせ信者達も両手を広げた。

『我等に主の加護あれ』

（どう思う？）

肖像画に向かって祈りを捧げている信者達に聞こえないように樟葉は亨達に意見を求める。

（どうもこうもこんだけの情報じゃ何も分かんねえよ）

（カリスマはあるみたいね〜）

（強いて言うなら…）

（言うなら？）

（きたねえ肖像画だな）

（…そうね）

その後幹部の指示で亨と樟葉、少年とミクに部屋を振り分けられた。

「何でワタシがアンタと一緒になのよ」

「んなもん知るか」

「もし一ヶ月に一度のイベントがきたらどうすんのよっ」

「どうもしねえよ」

「少しは気にしろ！」

あまりにも理不尽な一撃を重心を下げることで威力を弱めながらベツドに倒れこむ亨を見ながら樟葉が呟く。

「あゝ、女同士にして欲しかったわ」

樟葉が亨に愚痴を言ってる時、もう一つの部屋はミクと少年は互いに備え付けられてるベツドに座り話していた。

「『少年』君の好きな食べ物ってなに？」

「肉」

いつも通り何を考えてるか分からない笑顔で質問するミクに対してつまらなそうに少年は応える。

「『少年』君は何で樟葉ちゃんと一緒にいるの？」「…遠い親戚で上京するときに同居させてもらってる」

「嘘よね、それ」

いつもと変わらないが本質が全く違う笑みで言い放つ。

「『少年』君のこと、少し調べさせてもらったよ」

「……」

「出生届、住民票、戸籍：探してもどれも見つからない、いや最初から『存在』しないんじゃないかな」

「だからどうした」

「どうもしないよ。ただ一つだけ気になることがあってね」

そこで一旦言葉を切り、立ち上がる。そのまま少年の横に座る。その顔にはいつもの笑みはなく、完璧なまでに無表情だった。

「キミは『井波郁紀』^{ふみのり}って知ってる？」

「……」

少年は応えない。それでも構わずミクは話を続ける。

「この名前は鬼籍にあっただけで生前は樟葉ちゃんの弟だったのよ。記録では8/7に亡くなっているの。そして樟葉ちゃんがキミを捜査第零課に連れてきたのがその翌日。…偶然かもしれないけどキミは何か知ってるんじゃないの？」

「仮に何か知ってたとしても俺がお前にそれを話して何になる？」
心底うつとうしそうな声を出しながら黒い帽子の奥から紅い眼がミクを睨む。しかしミクはその視線に臆することなく正面から向き合う。

「何にもならないわよ。でも好奇心がもう一步先を欲するの」「…面白い『人間』だ」

「お褒めの言葉を頂いて光荣だわ」

二人してニヤニヤしている風景はかなり不気味だがこの場にそれを指摘する者はいなかった。

沈霊唄賛 6

「どう思いますか？」

夜にも関わらず照明をつけずに手元の口ウソクの明かりだけで作業をしている老人に捜査第零課の面々を担当した司祭が尋ねる。

「限りなく黒に近いんじゃないかな」

男は書類から目を離さずに世間話をするように軽く応える。

「なら……！ いますぐにでも『異端者』として『裁く』べきかとっ」
信者の前で浮かべている笑顔を消し憤怒の表情で男に詰め寄る。

「いや、もう少し泳がせておこうじゃないか」

それまで作業を止めなかった男が初めてペンを置き、顔を上げた。
そこには穏やかだが黒い意志が揺らぐ瞳があった。それに気後れしたのか司祭は少し身を引く。

「しかし……」

「私は『限りなく』黒に近いと言ったんだよ。確実な黒じゃないのに『裁く』のはマズイよね」

司祭の歯切れの悪い言葉に男―教祖は子供に話しかけるように優しく諭す。

「まあ何かあつたらすぐに対応できるように呼び掛けとこうかな」

潜入二日目

奇妙な歌声と共にこれまた奇妙な曲が部屋の隅にあるスピーカーからかなりの音量で流れたしたことにより樟葉は半ば強制的に目を覚ました。

「……何よこの曲？」

不機嫌を前面に押し出しながら亨に尋ねる。

「昨日06：30に起床と伝えられてたぜ」

「んなこと聞いてないわよ。アンタの聞き間違いじゃない？」

「そうだとしたらコイツを説明してみろ」

そう言いながら部屋に備え付けられているスピーカーを指差す。

「…帰ったら寝れなかった分取り戻そ」

支給されたローブを羽織り可能な限り表情を出さないように礼拝堂に來た樟葉だが滲出る不機嫌は隠しきれないらしく気安く話しかけてくる者はいなかった。

「どうしたの？」

樟葉達が礼拝堂に入って少し経ってから來たミクがいつも通りの間延びした声で話しかける。

「……」

無言でミクを見ると一拍おいて樟葉が溜め息を漏らす。そのままミクの後ろにまわりおもむろにミクの胸を揉み始める。

「あっ……」

「…この膨らみの中にはいったい何が詰まってんのかしら？」

「だっ…樟葉ちゃん…ああ…皆が…見てるのに…」

「くだらんコントをすんな」

「三文芝居だな」

冷静につつこむ二人の反応がつまらなかったのか渋々と離れるがその目は未だにミクの胸を見ている。苦笑いをしながら少し距離をおくミクの背中に誰かがぶつかる。振り返れば黒のフレームメガネをかけた三十代半ばであろう男性が申し訳なさそうな顔をしていた。

「おっと、すみません」

「周りを見てなかった私が悪いですよ」

「いえそれは私も同じことですから」

「ではおあいこですね」「ハハハ、そうですね」

ここにいとゆうことは少なくとも悩みを持っているだろうが男性からは全くそれらしさが感じられない。それが樟葉が抱いた感想だった。

（…ねえ亨）

（何だ）

（あの人どっかで見たことない？）

（ない）

（即答かよっ）

（当たり前だろうが…てかなんで俺が知ってるんだよ）

（仕事柄多くの人に会ってんでしょ？なら今までに会ってる可能性もあるでしょ）

（んなもん見たら分かるわ）

（あっそ）

「ところで貴女はどのような悩みでこのような所に？」

二人が小声で話している間にミクと男性の会話は進んでおり様子を見る限り短時間で親身になったようだ。

「お恥ずかしながら恋人にふられちゃって」

「まあキミぐらいの女性ならかなり大きな悩みだろうね」

「はい。ところで貴方はどうして？」

「私は脱サラしてパン屋を始めたけど上手く起動に乗らなくてね…妻と子供に見捨てられてしまっただけ」

頬を掻きながら自虐的に笑う男性にミクは目に涙を溜めながらうなづく。

「でも最近はそのようなことも気にならなくなってね。これも教祖様のお陰だよ」

「そうなんですか」

納得しながらミクが樟葉にアイコンタクトを始める。

（もう少し話してるね）

（了解）

一瞬で意思疎通を済ませ、ミクがまた男性に話しかける。それを確認して樟葉がその他を連れてその場から離れた。

「教祖様。ターゲットの一人が離れました」

舞台袖で司祭が横で清水で手を洗っている教祖に報告した。

「何をしているのかな？」「信者の一人と話しております」「うん、良きかな」

それを聞き満足そうに微笑みながら頷く。

「そんな悠長な…」

「何を言っている。私は私を信じてくれている彼等の幸せが好きなんだ」

微笑んだまま司祭を見る教祖から黒い意志は見えない。

「仲良くしてくれるならそれでいいんだよ。争いは愚かで醜いからね。このまま何事もなければそれが一番だよ」

沈霊唄賛 7

時を同じくして場所は捜査第零課。

「おはようござ…」

定時に出勤した増田の視界に真っ先に飛び込んできたのは、ちやぶ台を引っ張りだしてそこで酒を呑んでいる劉玄と日比野の姿であった。

『見つからないうちに今日は帰ろう』と決めた増田が捜査第零課の扉を閉めるより先に劉玄が気付いた。

「増田、そんなところにつつ立つとらんでさっさと入ってこい」

「…はい」

見つかつてしまったからには逃げることは無理と判断し渋々捜査第零課に入ると案の定物凄い酒の臭いが増田の鼻を刺激した。その臭いに思わず鼻を押さえ、辺りを見渡す。よく見ればそこらじゅうに潰された缶ビールやらビール瓶、拳句の果てには綺麗に解体された樽であろう木材まであった。

「ただだけ呑んでるんですか？てかいつから呑んでるんですか？」

「いつからだったかのう…覚えとらんか日比野？」

「…確か昨日増田が帰ってから久しぶりに『組み手』をしてもらって、小一時間やった後に課長が奥から酒運んで来てからだから…20：00ぐらいからだな」

赤ら顔をしているが意識がしっかりしている日比野と同じく赤ら顔をし、いつもと変わらない笑いかたをしている劉玄を見比べて増田は呆れた。

「…まさに蟒蛇だ」
へびおみ

戻って狼誠教の礼拝堂

ミクと別れて取りあえず人が集まっている所に行こうと三人が歩き

始めたとき、どこか場違いな鐘の音が響いた。それと同時に全ての人間が一斉に黙り舞台の方に注目した。

鐘の音が鳴り止む頃に舞台袖から初老の男性がゆっくりと舞台中央に向かつていく。樟葉が回りを見れば全員が両手を組み、目を閉じていた。慌ててそれに倣い手を組んだがその頃には老人は既に移動を終えていた。

老人はマイクスタンドのマイクを手にとると信者を見渡すと微笑み言った。

「お早う」

その一言で樟葉の膝は震えだした

（…っ！？何！？何なの、この感覚！？まるでアイツに初めて会った時と同じ…）

たった一言―それも他愛もない朝の挨拶だけなのに樟葉はその奥に潜んだ闇を見つけていた。その余りの暗さに足が震え、冷や汗が止まらず、焦点が合わなくなる。そのまま闇に吞まれ意識を失いそうになるが不意に肩に手を置かれた。振り返れば真面目な表情をした少年と目があった。たったそれだけなのに樟葉は不思議と安堵を覚え、意識を保てた。少し余裕を持てたので隣に亨を確認してみると全く動じてないようだったが明らかに目付きが悪くなり敵意を剥き出しにしていた。

（ほう…私の闇に気付いているな。しかも吞まれないほど意志の強いのでいる）

教祖―大上誠は舞台の上から全てを見ていた。異端者達がどれほどの者かを確かめる為に闇をさらけだしてみたが予想以上に強い意志の持ち主が複数いることに気付いた。

（これは早めに『裁いた』方がよさそうだな）
そう思いながら毎朝の礼拝を終えた。

朝の礼拝が終わるとそのまま全員が食堂に移動し、朝食をとる。その後は基本的に自由時間であり、外出届けを出し13:00までに戻ってくれば何も言われないらしい。

「とゆうわけで俺は貯まつてる書類を片付けるために事務所に戻るから後は頼んだ」

「待ちなさい」

ロビーにて外出届けを提出しようとした亨の奥襟を樟葉が掴んでいた。

「こちとら忙しい中手伝ってんだ」

「こつちがさつさと終われば手間は消えるわよ」

「急ぎの案件なんだよ」

「雪奈ちゃんと忍ちゃんに任せなさいよ」

「あいつらに無理はさせたくない」

「あゝム力つく！ちよつとミクさん！何か言ってやってよ」

「根岸ならもう出てったぞ」

「なっ！？」

「次いでにアイツも一緒に行った」

「協調性のない奴ばつかね！」

「樟葉ちゃんおいてきぼりにしてよかったの？」

「邪魔だからな」

その頃、少年とミクは正式な手続きをして建物の外に出ていた。

「私より動けると？思うけど」

「ネコ被ってんな。テメエの方が慣れてるだろうが」

「まあ正直近いうちにあの娘には抜かれそうだけど」

周りには聞こえないように小声で話ながら辺りの気配を探る。

「…三人ね」

「わざわざ尾行までつけられてんだからもうバレてるな」

「そうね」

そのまま足を止めずに十字路を右に曲がった。

「そこを右に」

「了解」

二人が曲がった方向に三人の人間が距離を保ったまま近づいていく。そのうちの一人が身を出さずに二人の行方を確認する。

「……っ？いないぞ」

しかしそこには誰もいなかった。

「そんな馬鹿な」

一番後ろにいた男がそれを確認するために前に進もうとする。そのとき頭の上に何かが置かれたのを感じた。疑問に思い上を見ようとしたが

そのまえに顎を掴まれ首を捻り折られた。

その時に鳴った音に反応して振り向いた二人の内、殺された男に近かったのは顔の側面を掴まれ塀に叩きつけられ頭蓋骨が砕けた。そのまま脳も圧迫され一瞬後には頭蓋骨の破片が刺さり死亡した。もう一人はその行為を目視して声を出す前に後ろから首を極められそのまま意識を落とされた。

この僅か十数秒の間に死体が二つ、意識のない人間が一つ出来た。

「もしもし課長ですか？今からGPSのアドレス送るので死体の処理をお願いします。……いえ、二つですよ。あと一人いるので、そっちは尋問お願いします」

沈霊唄 7・5

12:16 笠羽事務所

「さてこんなもんか。後は任せたぞ」

「オツケー、この忍様に任せなさいっ」

「雪奈、コイツが余計な事しないようにしっかり見張っといてくれ」
「わかりました」

「アタシを信用してないの？」

「ああ」

「即答!？」

「てなわけで任せたぞ、雪奈」

「はい、亨さんもお気をつけて」

12:50 狼誠教・ロビー

少年とミクが戻ってきて見たのはソファでうなだれてる樟葉の姿だった。

「何してんだ？」

少年が声をかけても反応はない。

「樟葉ちゃん、何かあったの？」

ミクが声をかけても反応はない。

寝ているのかと思いい顔を覗き見たがしっかりと目は開いていた。しかしその目には意志は宿っておらず口はパクパクとしており、まるで魂が抜けたかのように惚けていた。

「どうしたんだ、こいつ？」

「さあ？」

「て、た、だ、わた、な……」

「……んっ？」

微かに声が聞こえたので二人は樟葉に顔を近付ける。

「見捨てられた…誰も私の周りにいない…見捨てられた…誰も味方がいない…」

「……」

「…シヨックが強すぎて…ネガティブになっちゃってるね…」

12：54　狼誠教・？

「…もう少しかな」

窓もなく照明もない。そんな暗く閉ざされた空間で大上誠は燭台しよくだいを手に持ち『ある物』を見ていた。

「アレから約30年…月日が起つのは早いものだ」沁々しみしみとする時計のアラームに邪魔され現実を引き戻される。

「さて…そろそろ行かないとな」

潜入から三日目。昼の礼拝が終わりまたも各自自由になっていたの
で捜査第零課の面々は全員が外出届を出して近くの喫茶にきていた。
「やはりバレてたか」

少年の報告を聞きながらコーヒーを飲む亨が呟く。

「まあこつちもそれは覚悟でやってるからね」

亨の呟きを聞きながらチーズケーキを食べる樟葉がさも当然のよう
に言う。

「でもこれではつきりしたね」

サラダを食べるミクの表情はいつもと変わらない。

「にしても懲りずにまだつけるってのはアホらしいな」

イチゴパフェを嬉々とした表情で食べる少年がちらりと後ろを見れ
ば白いローブをはおった男女が四人がこちらの行動を逐一観察して
いるのが見えた。

「…いくらなんでもあからさま過ぎない？」

「大方『もう目はつけてるぞ』ってゆう警告だろ」

「それでも止めませんけどね」

「ところで」

不意に少年が口を挟んだので三人共が少年を見る。正確に言えば少
年の手にある伝票を見た。

「割り勘か？それとも誰かの奢りか？」

その一言で全員がそれぞれが顔を見合わせた。

「…ここは最年長のミクさんが払って下さい」

「いやここは男性である亨さんが」

「一番高いモン食ってたヤツが払うべきだ」

「らしいわよ」

「なんで割り勘をしたがらねえんだ」

四人の中では一番大きい男がコーヒークップ片手に携帯電話で会話をしていた。

「教祖様、今日にでも行動を起こすようです」

『そうですか。じゃあ君達はいますぐ帰ってきなさい』

「いや…もう少し監視を続けます」

『…わかりました。しかし危うくなったらすぐ逃げるんだよ』

「了解しました」

「連中が会計を終えて出ていきます」

「よし、追うぞ」

「待て」

女性の報告により青年が立ち上がるが老年の男性によって止められる。

「…何だ？」

青年がいらついた様子で老人を見る。それにつられて全員が老人を見た。正確には老人の手にある伝票を見ていた。

「誰の奢りだ？」

「…割り勘ですよ」

老人の戯言を代表して女性が返答した。

結局のところ、樟葉達は喫茶店に寄っただけですぐに戻った。ただししっかりと追跡者を捜査第零課に引き渡してからだが。

「もはや限界ですっ！」

「こらこら、そう声を荒げないで。ほら深呼吸して落ち着いて」

「これが落ち着いていられますか！こちらの者が既に7人も行方不明になっているんですよ！」

「確かに多いけどそれだけ慎重にならないといけないんだよ」

「……？」

「言い換えれば他人を躊躇なく始末できる奴らなんだよ」

「……あ」

「私としては無闇に死人は出したくないんだ」

「ならどうすれば？」

「餌を撒くのが一番だと思わないかい？」

『井波樟葉さん、笠羽亨さん、根岸ミクさん。館内に居られるのであれば至急『裏庭』講堂までお越しください』

17:00の礼拝が始まる前に一行は館内放送によって呼び出された。

「教祖から直々にご氏名かよ」

「これは〴〵チャンスですね」

「……何か罫を張ってそうだな」

「虎穴に入らずんば虎子を得ず！たとえ何かあっても行かねばなるまい！」

「……おい」

「なんだ？」

無駄にテンションが高い樟葉を見ながら亨は横にいる少年に話しかける。

「いつもこんな感じなのか？」

「テメエの方が付き合いが長いだろうが」

沈霊唄賛 9

「そういえば俺は呼ばれてないから行かなくてもいいんじゃないか？」

鬱蒼とした森の中を歩いていると『少年』が呟くように言った。

「はあ!？」

『アンタ何言ってるの?』と言いたげな顔で樟葉が振り向く。

「俺の名前だけ呼ばれてないぜ」

さも当然だ、と言いたげな顔で樟葉を見る少年。もつともな理由に言葉がつまる樟葉がミクに助けを求めるように視線を向けるが、当のミクはそれを無視をする。仕方なく亨に視線を向けるも『自分でどうにかしろ』と言いたげな顔で見返す。

「…じゃあ外で待ってなさい」

「へいへい」

樟葉の提示した妥協案に適当に返事をしながら欠伸をした少年は知らぬ間に後ろからついてきている気配を意識しながら樟葉達には報告しなかった。

「おや?もう一人いた気がしたのだが…?」

椅子も机も何も無い、ただ広いだけの講堂。その奥に飾られている鎖で縛られたよく分からない化物の前に狼誠教の長である大上誠は立っていた。

「なんか名前呼ばれてないから中には入らないって言ってました」

「そうか…まあいいか」

「それで…教祖様直々に御呼び出しとは…一体何事ですか」

「ふむ…それについては君達自身が良く分かっていると思うのだが」その言葉で講堂内は緊張に包まれた。

「私の計画に賛同してくれたなら便宜を図ってあげてもいい」

いつも通りの口調で話しかける大上だがその奥には深い闇を滲みだしている。普通、命の危機に晒されている状況なら死を覚悟出来ず生きる道があるならそれが畏らうと今を生きるために逃げを選ぶ。しかしここにいる面々は死を覚悟出来る人間であり、確固たる意志を持つ人間であつた。

「どうせロクでもないことだろうから断る」

「そうか…それは残念だ」

樟葉の返答に本当に残念そうな声を出した大上が指を鳴らし、それを合図に像の後ろから様々な武器を手にした信者が現れた。

「本当に残念だ、君達を『異端者』として裁かなければいけなくなつてしまった」

『異端者』を襲うように合図をしようとした大上を「待て」と亨が片手を突き出し静止させた。

「何だね？」

律儀にもそれに応じる大上を睨みながら亨は背後にある扉を指差す。「一応聞くがまさか『唯一の出口は封鎖しました』なんて言わねえよな？」

「私は王道は好きだよ」「そうかよ」

「質問はそれで終わりかね？」

「ああ、そうだよ…つと」

会話が終わり大上が合図を出したのと同時に亨は信者達の前と後ろにあるドアに小さな棒が刺さつた粘土のような小さな塊を投げつけた。

「伏せろ」と樟葉達にだけ聞こえるように言うと言に握っていた機械のスイッチを押した。

直後前後にある粘土のようなもの―C4爆弾に刺さつた雷管に電流が流れ、それによって爆発を引き起こした。

「ちよつと亨！予告ぐらいしな」

樟葉が亨に文句を言うが途中で言葉が途切れる。何事かと亨が見れば伏せている樟葉の目の前に人間の腕が落ちており、それを見たま

ま固まっていた。

「…行くぞ」

樟葉の手をとり無理矢理立たせ亨達は吹き飛ばされたドアに向かって走りだした。

樟葉達が『裏庭』講堂に着いたと同時刻。教祖様の描かれた大きな肖像画がある講堂に信者が集まっていた。しかし誰一人として穏やかな顔をしておらず、戸惑いの表情をしていた。

「皆様！」

舞台の上に立っていた司祭が声を張り、集まっていた信者の注目を集める。

「残念ながらこの我等が神聖な地に『異端者』が侵入してしまいました」

その言葉に信者は一斉にざわめきだす。

「しかしそのことを事前に察知した教祖様が現在『裏庭』講堂にて裁いております」

『裁いている』と言う言葉に安堵の息を漏らす信者達に「しかし」と司祭は言葉を繋げる。

「万が一の可能性もあります。皆様に協力をしてもらいたいのです」

続いた言葉に誰かが尋ねた。

「協力とは？」

「簡単なことです。もし逃げ出してしまった時に教祖様がすぐに駆け付けられるように包囲をしてもらいたいのです」

質問に答えた司祭はそのまま舞台袖から水が入った桶を運ばせた。

「協力してもらえる方は魔からの守護の効果のある聖水を飲んでもらいます」

そして一緒に運ばれてきたコップに水を入れるとそれを掲げた。

しかし一人も舞台に向かおうとせず周りの人間の行動を伺うだけだった。

『…こえますか？…』

その時、備え付けてあったスピーカーから声が聞こえた。

『皆さんこんばんは』

それは教祖である大上の声だった。

『突然ですが残念なお知らせがあります』

教祖様の言葉を一言一句逃さぬように信者達は耳を傾ける。

『講堂にいる方は既に聞いておられるでしょうが侵入していた『異端者』が逃げ出してしまいました』

その一言で辺りはざわめき始めた。

『そこで皆さんの力を貸して頂きたいのです。私は直ぐに準備をしますのでどうか追い詰めて下さい』

そこでスピーカーは切れ、講堂内は静かになった。

「さあ、決断を！」

司祭の言葉に数人が向かおうとしたが躊躇うように止まってしまふ。

「私はここに救われた…今度は私が救う番だ…」

だが一人の男が呟きながら舞台上がり、司祭から渡された聖水を迷わず飲むのを見るとそれを皮切りに一人、また一人と聖水を飲み、遂に全員が飲んだ。

逃走から数分経ち、逃げ込んだ茂みにて周りに人がいないことを確認すると一行はやつと息をついた。

「大丈夫か、樟葉？」

屈みこんでいる樟葉の背中を叩きながら亨が声をかける。

「何とか…でもこれからどうすんのよ？」

それに顔を青くしながら樟葉が何とか答える。

「んなもん俺が知るか」

樟葉の問いをぶっきらぼうに少年が突っぱねる。

「とりあえず、決定的な何かを、捜そうよ」

今回の目的を早く済ませると同時に自身の安全を確保するためにミクが発言した。

「目立つわけにはいかないから別れるか…」

亨の提案に一同は迷いなく賛同し、樟葉と少年、亨とミクに別れ失踪事件の具体的な証拠を捜すために行動を起こした。

「でも、何処にあるんでしょうね？」

「もう一度樟葉アイツがいないときにその喋りかたをしたら寝かすぞ」

いつもののんびりとした口調で話しかけたミクに亨は周囲の状況を探りながら嫌悪感丸出しで釘を刺す。

「…亨くんはカツコイイから食べちゃいたいなあ」

「そういう冗談もいらないからな」

「いやいや、私は本気よ」

「悪いが俺はお前が嫌いだ」

「なんでさ？」

「無駄に胸に脂肪がついてるからだ」

「…亨くんって貧乳フェチ？」

「そついやさあ」

「あん？」

木に登り、辺りを見渡していた樟葉の独り言に少年は律儀に反応する。

「なんで支持されてんだろっね」

「……」

「だってここの売りは『一度諦めた夢を取り戻す』よ」

「だから？」

樟葉の言葉を少年はどうでもよさそうに聞き返す。

「普通そついう類たぐいのモノは物理的な奇跡でもなんでもいいから見せるものでしょ？でも私達が来てからそんなこと一回もしてない」

「人間なんて現物がなくても言葉だけで騙されるようなヤツだ」

少年は全てを嘲笑うかのよう――まるで程度の低いものを見るような感じで言う。

「それはそうだけど……初めて来たときにあの講堂にいたのがざっと300ぐらい。確信はないけど設備、土地の広さ、物品の多さを見た限りあの時^夜にここにいなかったのも併せるとざっと600〜800ぐらいはいえると思うの。それだけいれば理解力のある人間だっているはずだし、誰かが疑問に思ってもおかしくない」

そこで初めて少年は眉間に皺を寄せ、不快感を露にした。

「……何が言いたい？」

「もしかしてどこには『アンタの同類』が関わってるんじゃないの……それをアンタは最初から気づいてたんじゃないの？」

「何を根拠に言う？」

「潜入前に『良い予感がする』って言ってた。アンタは『予感』じゃなくて『確信』をしてたんじゃないの？」

「……今答えて何になる？状況は動いてるんだぜ。解答なんて終わってからで充分だろ」

樟葉の質問に答えずに少年はさっさと目的に向かって行動を始めていた。

純粹な殺意。そんなものは人間が生涯生きていく中で子供の頃―手加減を知らない悪意―と危ない橋を渡らなければなかなか当てられるものではない。前者は自身と相手の力量と知識が人間を殺すのに対して圧倒的に少ないので死に到るまではならないことが大半であるが、後者は社会において暴力を資本としている団体や表向きに社会に参加していないような人間などに関わりを持たなければよいだけで大半の一般人は自らそのような輩に近づくことはないだろう。

しかし、『質より量』という言葉があるように小さな力でも多く集まれば強大な力になる。

「まさかこんなにいるとは思わなかったよ……」

建物の中に入ろうとしていたミク達を止めたのは隙間なく周りに集まった信者達だった。それぞれが武器を手に持ち、殺意―人で無いなら殺してもいいと言う考えにとらわれて信者以外は人間と捉えられない―を剥き出しにした人間がおよそ200人……ただ見えないだけで後ろに更に100人程いるだろう。

「私達の聖地に侵入したことを浄化された後に後悔するのだな」

司祭らしき人間が武器を構えながら言う。それに合わせて周りの信者もそれぞれの武器をミク達に向けた。

（どうする？）

ミクが亨にだけ聞こえるように尋ねる。その問いに亨は嬉しそうに口を歪め歪な笑みを浮かべながら答えた。

「決まってるんだろ」

指を鳴らし周りを一別すると一喝した。

「ぶつつぶす!!」

「何か聞こえなかった？」

その頃樟葉達は外壁に沿って念入りに証拠捜しをしていた。

「気のせいだろ」

「まあどうでもいいか」

自分達に降りかかる厄介事以外にはあまり興味を持たない樟葉は先程聞こえた音を意識の外に追いやり、やるべきことに専念する。

「しかし普通は中心を調べるものじゃないの？」

「いいから調べる」

「アンタも調べなさい」

「…俺は関係者じゃないんだがな」

「ここにいる時点で関係者よ」

文句を言う少年に樟葉は命令する。渋々従う少年は嫌そうに外壁を調べ始める。「ホントに何かあるの？」

「あるはずだ」

調べ始めて約30分。正直面倒だと感じていた樟葉は少年の推測に文句を付けた。それを一蹴する少年は先程から外壁の下を見ていた。「アンタのその自信はどっからくんのよ…」ってなにこれ？」

ぶつぶつ言いながら樟葉は外壁に書かれた小さな印を見つけた。

「ねえ、これでいいの？」

「…ビンゴだ」

その印は円形でその外周に沿ってよく分からない記号が書かれており、中は六芒星^{ヘキサグラム}が書かれており更にその中にも五芒星^{ペンタグラム}が書かれていた。そしてその印の下に外壁の色が変わる部分が接している。

「これって…何？」

「これは結界の準備式だ」

樟葉達が中心に向かわなかったのには理由が二つあった。一つはミク達に注意を向けて時間を稼いでもらうこと。もう一つは証拠以外

の『何か』を探すためであった。

「準備式？結界と何が違うのよ？」

「こいつ自身は単体じゃ、ただの落書きだ。だがある規則従って幾らか並べるとより少ない力で効果が得られる」

違いが分からない樟葉に少年は珍しく説明をする。

「じゃあこれを消しちゃえば他のも効果が無くなるってことね」

「いや、ダメだ」

そう言いながらナイフを取り出し壁に傷をつけようとする樟葉を少年は止めた。

「さっき言った通りコイツはある規則に従って書かれてるんだ。そいつを崩すってことは違う規則に書き変えるってことなんだよ」

「…？」

「『seek（探す）』の『k』を抜けば『see（見る）』になるだろ。つまり全く別のものになっちまうんだ」

「えっと…本来守るの意味がある式が破壊の意味に変わるかもしれないってこと？」

「そういうことだ」

「でも…これでこの教祖は『アンタの同類』に関係しているってことは分かったわね」

「試験終了前にカンニングペーパーが見つかったな」

そのころ大上は一人、地下に続く階段を降りていた。そこは明かりも無く暗闇が支配しており、足を踏み外せば惨事になるであろう。しかし何事もなくその階段を降りきり平坦な道になっても辺りは相変わらず見えず、全てを拒絶するかのような闇の中を迷いなく一歩ずつ進む。やがて壁に突き当たったが大上は迷いなくそこに横にあった突起を掴み、それを回すと目の前の壁が上がりその先に道が出

来た。それと同時に今まで歩いて来た道に灯りがつき周辺一骨で造られた台に置かれている生首が見えるようになった。その間にも大上は奥に歩き続ける。

そして丸く開けた場所に出ると真ん中に安置されている棺桶の表面を優しく撫でた。

「もうすぐ…もうすぐだからね」

優しい口調で棺桶に話しかける大上の目は自身に染み付いているであろう闇は一片もなく、ただ澄みきっていた。

沈霊唄 11 (後書き)

少しばかり内容がおかしくなってきたいますが気にしないで下さい

しばらくして樟葉達は外壁に書かれた紋章を五つ見つけた。それらは等間隔に刻まれており、結ぶと大きな円を作っていた。

「結局これは何なのさ？」

「……さつきも言っただろ。『結界』だ」

「だから、何の効力があるのよ」

「それは知らん」

きつぱりと言う少年に不満そうな視線を向ける樟葉だがすぐに辺りを見渡した。

「しかし誰も来ないわね」

放送があつてから既に10分以上経っているのに樟葉は誰一人として見かけていない。きつと亨達が足止めに成功しているのだろうと思っていたが少年がある一点だけを見ているのに気付いた。

「出てこい」

ただ一言、それだけ言うつと茂みから真つ白な仮面をつけた男が一人出てきた。男と判別出来たのは短く切り揃えられた髪と衣服が前を開いたアロハシャツ一枚に短パンだったからだろう。

「アンタは？」

樟葉が聞くが男は何も答えない。

「お前は味方か？」

少年の言葉に男は首を横に振る。

「じゃあ敵ね」

樟葉の言葉に男はまた首を横に振る。

「……」

男は無言のまま二人に近づくと胸ポケットから紙を一枚出した。樟葉が男と紙を交互に見ていると男は少年の手を取り、紙を握らせた。そして振り向きながらポケットから防犯ブザーを取り出すと何の躊躇いもなく紐を引き、それを樟葉に投げた。

「何の音だ？」

左の方から声と複数の信者が来るのが見える。急いで樟葉は慌てて防犯ブザーを止めて隠れようとするが少年は愉しそうに口を歪めせると指を鳴らした。

「バカッ！早く隠れなさい」

「…はいはい」

渋々樟葉に従った少年を連れて茂みに隠れ、樟葉はもう一度防犯ブザーを鳴らし、遠くに投げた。

「あっちだ！」

愚直にも音に反応して手に棒を持った信者達は樟葉達の前を通り過ぎて行った。

「なんで殺らせてくれなかった？」

「なんでって…あの人達に罪はないでしょ」

少年の言葉に樟葉は呆れながら返す。

「なんでも殺していいってわけじゃない」

「知ってる」

「じゃあ何で？」

「それが奴らのためだったからだ」

「何でそう言えるのよ！？」

「コイツだ」

少年は樟葉に先程貰った紙を見せる。そこにはただ一言『贅』と書かれていた。

「古今東西、馬鹿が人を集めてやることなんざ限られてる。さらに『同族』が関わっているからには一つしかない」

「だからって殺すのは…第一、行方不明者だけですんでもかも知れないし…」

「だから？お前もあの時、罪の無い人間も殺しただろうが。それと同じだ」

「…でも殺すのは良くない」

過去の行為を思い出したのか、うつ向きながら弱々しい声で言う樟

葉に背を向けて歩きだした。

「殺さなかったことに後悔するなよ」

その頃、亨とミクは

「しつこい奴らね」

「奴らも必死なんだろうな」

留まることを止めて森の中を走り回っていた。結局10人程叩きのめして面倒くさくなり強行突破しているわけだが結果的には時間稼ぎにはなっていた。

「しかし、これでいいのか？」

「どうということよ」

「樟葉達とバツタリ会わないかってね」

「提案したのはアンタだからね」

信者達と一定の距離を保ちながら走り続ける二人は時折曲がりながら逃走を続ける。

そのうち、信者達が減っていき、4人しかなくなったところで亨は方向転換する。疲れている上に急なことだったので反応が遅れた信者達を亨は一人つつ確実に殴り倒す。

「とりあえず、これで安心かしら」

「いや、むしろまずい状況だな」

亨の言葉に首を傾げたミクの上から信者が二人、鉄パイプを叩き付けようと落ちてくる。それを難無く避けて顔に蹴りを放つが、体制を立て直す前に茂みから一斉に角材が投げられる。避けきれずに角材を身体中に受けたミクは倒れた。さらに追い討ちをかけるように角材が投げられるが素早く亨は両手に一つつつ角材を拾うと全てを叩き落とす。

「大丈夫か？」

「右足が折れたみたい」

痛みに我慢しながら言うミクの後ろからにやけた顔をした司祭が近づいてきた。

「引つかかったな、異端者共！」

辺りを見てみれば亨達を囲むように信者が角材を手に持ち、司祭の指示を待っていた。

「ここは我々の庭。お前達は我々の手の上で踊っていたに過ぎないのだ！」

「チッ…」

亨が一人ならどうとでもなっただろう。しかし怪我人をかばいながら逃げるにはキツイ。

「さあ！裁きを受けるがいい！」

『待ちなさい』

何処からか聞こえた声に信者は動きを止めた。

「しかし教祖様…」

『誰が彼等を殺しなさいと言いましたか？』

「我々は教祖様の事を思っ…」

『そうか…でも大丈夫だ。準備は整った』

「そうなんですか」

『ああ…皆、ありがとう。そしてすまない』

教祖の言葉に信者達は戸惑う。『時間稼ぎ』をしてくれてありがとうは分かる。しかし『すまない』の意味を理解出来ずにいた。

その時、遠くにある塀が光を発し始める。全員が何事かと確認する前に変化が起こった。

信者達が一斉に急に苦しみだし、やがて動かなくなる。ただ一人の例外もなく、原因不明の発作で動かなくなっていく。

「なにこれ…」

しかし亨とミクは苦しむことなくその状況を見ていた。

同じ頃、少年と樟葉も同じ光景を見ていた。

「どうしたの？準備式が急に光り出したと思ったら何で皆、苦しみだしたの？」

「これが答えだ」

愉しそうに口を歪める少年に樟葉は困惑しか出来ない。

その時、樟葉の携帯電話に劉玄から着信が来る。

『尋問中に全員が死んだ』

「……こつちもそうです。私達を捜していた信者が次々と動かなくなりました」

『本当か？』

「はい」

電話の向こうから劉玄の息を飲む音が聞こえる。

『……樟葉』

「はい」

『自分の生命を最優先にしろ』

「わかりました」

それだけ言うと劉玄は受話器を置いた。増田が不安そうな顔で見えていたので、樟葉達は無事だと伝える。自分も現場に向かおうかと考えたが、止めた。

『井波樟葉君、笠羽亨君、根岸ミク君、そして『少年』君。君達には全てを話そう。だから『裏庭』講堂まで来てくれ』

樟葉達を除いて誰一人動かなくなつた敷地内に備えつけられているスปีカーからそれだけ聞こえると『ブツツ』と音を起てて切られた。『…間接的とは言え、人を殺して平然としていられるのは許せないわ』

「じゃあどうするんだ？アイツを殺すのか？」

「まさか」

そういうと樟葉は指定された場所に向かって歩きだす。

一方その頃、亨は死体を見つめていた。

「……」

「どうしたのさ？」

「…らへっ…」

「おーい、亨さ〜ん」

ミクの呼びかけにも反応せずには亨はブツブツと呟いていたが不意に何かに気付いたように頭を振るとミクを無視して歩きだした。

「ちよつと？」

「さっさと行くぞ」

「歩けないから背負ってってよ」

「…しょうがねえなあ」

四人ともほぼ同時に『裏庭』講堂に到着し、爆破された扉をくぐり中に入ると石像に持たれかかるように大上がいた。

「すまないね、呼び出したりして」

「それ以上に詫びる必要があると思うが」

「信者のことかい？」

「それ以外に何がある」

「私の言葉を拡大解釈してしまったせいで根岸君に怪我を負わせてしまったことは詫びよう」

亨の言葉に「すまなかった」と頭を下げた大上をミクは「過ぎたことだから」と言い、それ以上言葉を続けなかった。

「どうやって信者を増やしたの、そしてどうやって殺したの？」

「信者達には麻薬のように中毒性のある特殊な水を飲ませていてね、結界が発動すると肉体と魂を分離するようにしていたのだよ」

「そもそもなんでこんなことをしたのよ」

「それはここじゃあれだから場所を変えよう」

石像を動かすと階段があった。そこを大上はゆっくりと降りていき、一同は何も言わずについていった。

ろうそくの灯かりだけの道を歩きながら大上は話す。

「私は妻と息子と娘を養っただけのサラリーマンだった。特に生活には困っていなかったし、家族にも亀裂はなかった。だが不幸とは何処からともなく、気づく前に現れるのだ。娘が失恋したのだ」

「それだけで不幸？」

樟葉が空気を読まずに割って入る。しかし大上は苦笑しながら話を進める。

「最後まで聞きなさい。長年想い続けた相手、それは常に近くにいた存在――自身の兄だった。娘はなかなか立ち直れなかった。兄もそんな姿を見て精神的に参ってしまったのだろう。間違いを犯してしまったのだよ」

間違い――ようは近親相姦であろう。

「双方の同意があったんなら別にいいじゃねえか」

亨が倫理も何もない、ただの感想を言う。

「今の私なら許しただろう。でも当時の私は世間体を重視していた。

『このことが広まったらこの幸せな家庭が壊れてしまう』とも考えた。しかし常に事は進むものだ。二人が駆け落ちをしたのだ。そのせいで妻は身心ともに壊し、翌年には私は独り身になった」

階段を降りきり、真っ直ぐな回廊に着く。そこを歩きながら話は続く。

「それから数年後、私は子供達の行方を知った。私はすぐに会いに行った。その時には二人を責めるつもりは無くなっていた。ただ二人が今、何をしているか知りたかったんだ」

行き止まりに突き当たり、一行が足を止めると大上は突起に掴み、回した。すると壁が上がり道が出来る。そこには骨で出来た台とその上に置かれている生首が幾つも見えた。しかし一行は全く動じることなく大上を見る。

「おや、動じないのだね」「これぐらい見慣れてるし」

「これって、行方不明になった人々？」

「確かにそうだ。しかし勘違いしてもらっては困る。彼等は自ら協力してくれたのだよ」

「さいかよ」

そして一行はまた奥に向かって歩きだす。

「話を戻そうか。結局二人には会えなかった。交通事故に巻き込まれたのだよ。二人は即死、しかし生まれていた子供は無事だった。勿論私はその娘を引き取った。我が子のように可愛かったよ。様々な苦勞をしたがその娘はすくすくと育ち、自殺してしまった」

「…真実を知ったからか」

「学校で聞いたのか、近所の主婦が話してたのを偶然聞いたのかは分からない。だが確実なのは自分だけが生き残ったのが許せなかったのだろう」

一行が広い場所に出ると大上は「そこにいなさい」と言い、一人中央に向かう。

「私は彼女に強く生きて欲しかった。彼女を守るために死んだ息子達のために生きて欲しかった」

「…まさか、その娘を生き返らすために!？」

「その通りだ」

「ふざけるな!」

大上のあつさりとした返事に樟葉は怒鳴った。

「既に終わったことを蒸し返すな! アンタはその娘が何を思って死んだか分かってるのか! 彼女は自分の意思で命を捨てた! その意思を無視してまた苦しませるようなことをするのが良いわけあるか! また一人にしてどうするつもりだ!」

感情を剥き出しにして怒る樟葉に大上は悲しそうな顔をして言葉を返す。

「そうか…君はこの後に何が起こるか知っているんだね」

「……」

「しかし、そうしないためにも君達が必要なのだよ」

大上の言葉の真意が分からない亨とミクは樟葉に「どういうことだ?」と尋ねるが樟葉は大上を見たまま何も言わない。

「さて…質問は終わりかな?」

沈黙を肯定と判断して大上は中央にある棺桶に手を乗せる。

すると幾つもの光の柱が登り、それを繋ぐように地面に線が浮かび上がる。数秒後には光の柱は消えたが棺桶の上には歪な闇が浮かんでおり、その中から黒い甲冑が出てきた。

「何あれ…」

「同族だ。だが、俺よりも格下だ」

呟く樟葉に少年はミクには聞こえないように返す。

「お前が私を呼び出したのか？」

甲冑は流暢な日本語で話しかけて大上は動じることなく「ああ」と答える。

「お前は自分が何をしようとしているのか分かっているのか？」

「当然だ。そのためにキミを呼び出したのだから」

「ならこの後に何かがあるか分かっているのか？」

「当然だ。でなければ代役にやらせている」

「…あそこにいるのは何だ？」

「この後の事を任せようかと思っただけ」

「そうか…なら始めるか」

甲冑はゆっくりとした動作で西洋剣を持ち上げ、樟葉達がこれから何が起こるのか気づく前に一文字に振る。刹那に大上の首は跳び、残された体は内部から黒い炎が吹き出し、ものの数秒で焼きつくした。誰一人として目を背くことが出来ない中、甲冑は自らの中に大上の首を収め、棺桶を開け、中にあった白骨に手をかざした。すると足元の光が棺桶に収束し中を満たす。やがてそれが収まり、骨が宙に浮かぶ。骨は十字架に磔にされたように腕を広げると虚空から

肉が現れ、血管、内臓、筋肉の順に骨に絡み付いき、やがて肌色の皮膚が肉を包み、全裸の少女が出来上がった。

「…亨」

「なんだ？」

「あの娘のために服を調達してきなさい」

「はいはい」

緊張感のない会話をして亨が出ていく。

甲冑は少女の前まで上がると大上の頭を取り出した。頭部が紫の炎となり、元の大きさの半分程になると、甲冑はそれを少女の胸部に押しつける。炎は肉を焦がすこともなく何の抵抗もないまま溶けるように内部に消えていく。

「契約完遂だ…その人間達、こっちに来い」

樟葉達は互いに顔を見合わせ頷くと少年を先頭にして近づいていく。

「…何の用よ」

「一応聞いておこうと思ってな。お前達は何者だ？」

「ただの人間よ」

「ただの人間がこの状況を見て、まともにいられるとは思えん」

甲冑の言葉にミクは嫌な事を思い出し、顔をしかめる。樟葉は目の前の現実を直視するように甲冑から眼を背けず、ただ睨みつける。

少年は必死に笑いを堪えていた。その様子に気付いた甲冑が少年に問いかける。

「お前は何故笑っていられる？もしかして精神に異常をきたしているのか？ならば私が…」

「ハハハハハハッ！！」

甲冑の言葉を切るように少年が笑い声を出し始める。閉鎖された空間で響くその音は反響して幾重にも重なり、広がり、異常な世界を形成する。しかし樟葉には崩れた世界が『混沌』とした秩序によつ

て形成されるのを感じた。ミクが意識を失ったのが視界の端に見えたが樟葉はそれを『必然』と感じていた。例えミクが超人だろうと世界が、常識が崩れる中においては意識なんて保てるわけがない。なら樟葉は何故立っていられるのか？簡単なことである。『壊れた世界』を見ていたからだ。

「『混沌』を形成するだ……？そしてその中で意識がある人間……一体何者だ？」

「おいおい、まだ気付かないのかよ」

そういうと少年は帽子を脱ぐ。紅く燃える双眸、光すら飲み込むような黒髪。まるでおとぎ話に出てきそうな風貌の少年は帽子を甲冑に投げつける。甲冑は少年を見て動けない。しかし帽子が頭に当たり、我を取り戻すと剣を捨てて少年の前に跪いた。

「えっ、何？どういうこと？」

事態を理解出来てない樟葉を見て、薄笑いをしながら少年は言った。

「コイツは俺専属の騎士だ」

樟葉は気絶したミクを壁にもたれさせるとそのまま全裸の少女を見下ろしながら話している少年と甲冑を見た。

「しかし相変わらず下手だな」

「魂の定着は完璧のはずですが…」

「本当に？」

「全て参考書通りにやりました」

「じゃあそれが間違ってたんだ。お前はわざと記憶を虫喰いにしたのか？声帯も不完全、心臓の位置は逆、内臓の通る順番は滅茶苦茶。かろつじて生きてるがこれじゃあ、すぐに死んじゃうぜ」

「そうですか」

「『そうですか』って…お前には誇りはないのか？」

「ありますが、結果ですので」

「手伝ってやるから治すぞ」

物凄い不穏な会話をしているがとりあえず推移を見守るため樟葉も座る。

やがて話がまとまったのか甲冑が一步、後ろに下がった。

「行くぞ、しっかり見てろよ」

そう言う少年は少女に手刀を突き立てる。特に抵抗もなく、完全に入ったのを確認して少年は手を動かす。静まった空間に肉を掻き混ぜる音が響く。それに合わせて意識が無いはずの少女は痙攣をし、閉じられている目から涙が零れる。

「…これでよし」

やがて終わったのか、少年は手を引き抜く。少女の体に傷はなく、

穏やかな顔をしていた。

樟葉は途中から目を反らし、携帯で時間を確認していた。亨が服を探しに行つて、もうすぐ20分になる。裏庭からここまで5分もかからない。それに亨なら適当に死んでいる人間のローブを剥いで持つて来るだろうと樟葉は考えていた。何かあったのかと思い、電話をかけようとするが圏外になっており、結局待つしか出来ないようだった。

その頃、亨は

「……」

「……」

真つ白の仮面をつけた男と対峙していた。

「……」

「……」

亨は足元にあつた石を手にとると何も言わずに思いきり男の顔面に投げつける。しかし男はそれをしゃがんでかわす。

亨は足元にあつた石を手にとると何も言わずに男の顔面に投げつける。

男はそれをしゃがんで避けたが、亨が続けざまに石を投げようとしているのを見て、その場から飛び退く。しかしその行動を想定していたのかフェイントをし、男が動くのを待ってから投げた。

「……」

流石に避けきれず仮面に当たるが傷はつかなかった。男が亨を見るとガッツポーズをしていた。

「ところで、お前はどやって存在を保つつもりだ？」

「えっ？」

「そうなのか？」と言いたげな声色を聞いた少年は『俺がいない間にまともな書籍を読んでなかったな』と溜め息をついた。

「…『こつち』に来たら存在は保てねえぞ」

「ではどうすれば？」

「人間と契約しろ。多少力が抑えられるが体は保てる」

「なるほど…しかし、誰とすればいいのですか？」

「んなもん自分で考えろ」

面倒くさそうに受け答える少年に甲冑は悩む。

「まあ、普通は生き返らせた人間と結ぶもんだ」

「…そうなるはこの女ですね」

そう言つて甲冑は少女の足を掴み逆釣りにする。その行動に少年は呆れ顔で溜め息をつくことしかしなかった。

日は過ぎて、亨の事務所に樟葉は訪ねていた。

「結局、アレはあの娘と契約して、一緒に暮らしていると」

「ああ、あの娘がまた自殺をするんじゃないかと心配だったが今んとこ、そんな素振りはないな」

「ふーん」

樟葉が煙草の箱を出したところで例の少女―大上靖子が盆に湯飲みと急須を乗せて入ってきた。そして会釈をすると二人にお茶を注ぐ。そのお茶を亨は一気に飲みきり、樟葉は冷めるのを待ってから飲んだ。

「でも喋れないのよね」

「先天的な言語障害らしいからな」

「でもこっちの言葉は分かるのよね？」

「頼めば行動してくれるしな」

「ありがとね」

樟葉が靖子の頭を優しく撫でると少しくすぐったがりながらも笑顔になった。

一方その頃

「これが人間が普遍的に食べているものですか」

「この国のだな」

樟葉の部屋で少年はＴシャツにジーパンという格好をしている黒髪ポニテ少女―クロに食事を振る舞っていた。

「箸の使い方は分かるか？」

「分かりません」

「だと思った。だから今から特訓な」

「了解しました」

その日、樟葉家にあつた割り箸は悉く粉碎されたが、それはまた別の話。

双方思奸 1

劉玄に電話で呼び出された樟葉は目の前にいる外人の少女を見ながら仕事を確認する。

「護衛？」

「正確に言えば『相手を釣る為の罠』だがな」

劉玄曰く「彼女―外国の某有名企業の一人娘を誘拐しようと企んでいる輩を捜査零課で捕まえる」との事らしい。

要は自分に護衛を頼み、他の面々には周囲の怪しい人間を捕縛してもらうと樟葉は解釈をした。

「つまり私はこの娘と一緒にそこら辺を観光してればいいと」

「まあ、無茶しなければなんだっていい」

そこで会話を終えて、樟葉は対象を観察する。身長150後半、肉付きは太すぎず細すぎず。しかし出るところは出ており締まるところは引き締まっている。それが彼女が少女ではなく女に成り始めていることを示していた。

「私は樟葉。貴女の名前は？」

「ララ、ララ・バレンタイン」

自身が事件の渦中にいながら不安を表に出さず、いつも通りでいようとしているのを樟葉は「強い」と心の中で賞賛した。

「じゃあララ、何処に行きたい場所は？」

「日本の街並みを見てみたいです」

「オッケー、あと丁寧な言葉は止めて」

「わかったわ」

二人が部屋から出ていったのと入れ違いに日比野が缶コーヒー片手に部屋に入ってきた。

「今のが護衛対象ですか？」

「お前の仕事は索敵だな」

「分かってますよ。増田、発信機は付けたよな」

「ばっちりです」パソコンの画面には地図が表示されており、そのうえを赤い点が一つ移動している。

「よし、サポートはまかせたぞ」

「了解しました」

空き缶を握り潰し小型冷蔵庫から新たな缶コーヒーを取り出し無線のイヤホンを付けて日比野は監視に戻っていった。

「しかし、何故僕達がやらないといけないのですか？こういう仕事はもっと上の仕事じゃないのですか？」

「…多人数を動員して彼女にストレスを与えず、人混みを歩かせることにより可能な限り敵に強行手段をとらせない。と言っるのは建前で」

そこで言葉を切り、劉玄は茶を飲みほす。

「コネを作っておくのも悪くないだろ？」

「何を考えているんですか」にやつきながら言う劉玄にパソコンから目を離さずつつこんだ。

「じゃが大事なことだ」

「別に今することじゃないでしょう」

「今じゃなきゃ出会えんだろうが」

「国内に沢山作ってるじゃないですか」

「国内だけだからな」

「海外進出でもするつもりですか？」

「もしもの時に役立つだろ」

しばし沈黙が二人の間に流れる。その沈黙を破ったのはキーボードを叩いて先に出ていった根岸にメールを送った増田だった。

「…僕は課長の思惑を理解する気はないですが、仕事はこなします」

「うむ、だが無理はするなよ。お前に倒れてもらっては支障が出る

「からな」

「そう思ってくれるなら休暇を貰いたいですね」

それを聞いた劉玄は軽快に笑いながら「お前も樟葉みたいになればいい」と言いながら席を外した。

双方思好 2

笠羽亨はクロと共に駅前の喫茶店でケーキセットを頼んでいた。

「ふむ、人間の嗜好品も悪くないな」

「『あつち』じゃ、どんなもん食ってんだよ？」

「見た目はこちらとあまり変わらない。ただし味は人間が食べたものではないな」

「ふーん」

クロの言葉に一応納得しながら亨はレモンティを口にする。

「しかし、お前らは一体なんなんだ？」

「私達はお前達でない。これだけで充分だと思うが」

「…それもそうか」

そこで会話が途切れ、二人の意識はケーキに集中することになる。

しかし食べ始めたと同時に亨は自身の携帯電話が鳴り始める。

「……」

うつとおしそうに受信先を確認するとそこには『事務所』と書かれている。目の前のケーキを我慢しながら席を立ち、電話に出る。

結局彼はケーキをクロに譲り、代金を払った上で事務所に戻ることになった。

事務所に戻った亨が見たのは何処の国か分からないが怪しい雰囲気を出している三人の外人と茶を用意している雪奈の姿だった。

面倒事を押し付けられると感じた亨は内心『断ろうかな』と考えたが依頼を選んでいられる立場でないことを思い出し、話を聞くことにした。

「さて用件は何ですか？」

仕事用の顔を作りながらも相手に隙を見せずに尋ねる。

「この娘を拉致して欲しい」

流暢な日本語を喋りながら一枚の写真を机の上に出すと男は黙ってしまう。亨は写真を手に取るが意識は男に向けている。それなりの場数を踏んでいることを暗に示している目付きに袖下に吊してある拳銃は警察などが持つものに比べて殺傷能力が高すぎる。

「この娘について持つてる情報、そして何故拉致をするか教える」
自分はお前達の知ってる情報と交換に依頼を受けてやる。もし情報に嘘があつたら、それが分かった時点で依頼は取消し、ただし前金はいっぺり貰うと宣言した上で依頼するか聞く。亨は自分に不利益なことは可能な限り避けることで今まで生きてきた。それ故にマズイ状況に陥つたら安全を最優先にすることを言った上で尋ねた。
「分かった」

即答出来たことから一人は幹部級の人間であることを亨は予想した。その収穫は少なからず交渉をスムーズに展開することが出来る。更に自分の不備が組織に不利益をもたらす責任を取らされる立場にあるため人間は一応信頼出来る。

そんな考えと共に依頼についての話が始まった。

三人が帰った後、亨はボイスレコーダーに録音しておいた会話を繰り返して聞いていた。

「……久しぶりにデカイ仕事だが、なんでよりもよってお前なんだよ、ララ」

愚痴は誰にも伝わることはなく、ただ空気に消えていった。

「……そーいやクロのヤツ、遅いな」

それなりに時間は経っているが未だにクロは帰って来てない。

「余分に金は渡しといたけど……まさか追加注文してないだろうな」
食べたらずきに帰って来いと言ってなかったからそのまま待っているかもしれない。そんな考えに至った亨は面倒だと言わんばかりに溜め息を着くとクロを迎えに行った。

双方思好 3

一通り町を歩いて、ララは疲れていると勝手に判断した樟葉は駅前の喫茶店に入っていた。

「このケーキ、美味しいんだよ。私の奢りだから好きなの頼んでいいわよ」

「いいよ、自分の分は自分で払うから」

「円は持つてるの？」

「少しだけなら」

ララの言う少しと樟葉の少しは桁が一つ違うのだがそんなことに気づかない樟葉は「いいから奢らせて、そのお金はお土産でも買っためにとつときなさい」と言った。

「あれ、そこにいるのは樟葉さん？」

席に着く前に声をかけられその方向を見てみるとそこにはポニーテイルの少女が一人で座っていた。

「久しぶりね、忍ちゃん。今日は一人？」

「妹がお手洗いに行ってるよ。ところでその娘は誰？また変なことに首突っ込んでるの？」

「アンタは私をどんな目で見てるのよ。この娘は私の友達でわざわざ会いに来てくれたの」

部外者を危険に晒すわけにはいけない。更にこの忍という少女は昔からこつちの事情に首を突っ込もうしてくるのだ。現状を知ったら間違いなくマズイことになると樟葉は考えた。

「…初めてまして忍さん。ララと言います」

そのことを察したララは特に否定をしない。

「おお、日本語ペラペラなんだ」

忍がわりとどうでもいいところに感心した。

「祖母が日本人だったから」

「なるほど」

「あれ、樟葉さんと…誰？Who are you？」

お手洗いの方から忍を少し幼くしたような少女が歩いてきた。学校指定のセーラー服にツインテイル、一部マニアがいたら写真でも撮りそうだがここにはその類はいない。

「杏ちゃんも久しぶり、この娘は私の友達のララよ」

「はじめまして、ララ・クラフトです」

「あつ、ご丁寧にどうも。紹介にありました杏です」

忍とは違い出来た妹だと感じたララだが、姉が適当だからこそしっかりしていると思い直した。

双方思奸 4

裏路地を通り、最短距離で駅前に向かう亨の前に見覚えのある右のサイドポニーが見えた。

「よう、楓」

「ん？亨じゃん、久しぶり」

亨よりも身長が高く、スタイルも良いが純粋な笑顔と幼さの残る顔。楓はそんな女性だった。

「お前、クロ見なかったか？」

「クロちゃん？さつきすれ違ったよ」

「てことはちよいと遠回りしてんのかよ」

「心配なの？」

茶化すような言い方の楓に亨は「色々とな」と真顔で返した。

「ところでお前は何してんだ？」

「あつ！そうだ！姉さんが財布持たずに買い物行ったから届けに行く途中だった！」

「さいですか」

「なんか面白い事があつたら教えてねっ」

走って行った楓を見向きもせずには亨はクロが行ったであろう道を歩き始めた。

亨がクロを見つけたのはそれからすぐ、近くの公園で野良猫とじゃれあっている姿だった。

「…何してんだ？」

「…！！」

後ろから声をかけられたクロはあからさまに驚き、ゆっくりと振り向いた。

「いつからそこにいた？」

「今さっき。お前、猫好きなのか？」

「…見なかったことにしろ」

体から黒い何かを滲み出して脅してくるクロに対して亨は両手を挙げて降参の意を示した。

「見なかったことにするから落ち着け」

「本当だな？誰にも言わないな？」

「ああ、誰にも言わないから止めろ」

その言葉を信じたのか黒い何かを引っ込めるクロ。ほっとしながら帰路に足を戻す亨の携帯がメールの着信を知らせる。

開いたメールを見た亨は無表情で返信すると電話をかける。

「…ああ、俺だ。少し情報が欲しい。…現金より現物だと？俺が用意出来るものにしてくれ」

双方思奸 5

ララの護衛が始まってから二日が経った。その間に特に何も起こることもなく、町中も裏路地を除き、行ったことがないくらいになっていた。

「たとえ今日まで襲撃らしきものが無くても気を抜くなよ」

『そんなのゝ分かってるよ』

通信機越しにミクと気を引き締める日比野。

この二日間、何もなかったのは気を緩めるためかもしれないと推測して周囲に気を配るが特に何もない。

必ずどちらかが二人の近くにいるようにしており、もう一人は見えない場所に誰かが隠れていないか見るようにしていた。

「そつちはどうだ？」

『……』

「おい？どうした？」

「仕事早いなあ、まだ三分も経ってないのに」

「っ！？」

ミクからの応答がない。そのことに気をとられた日比野は後ろから誰か来ているのに気づくのが遅れた。

そこには口元を隠して長い黒髪を後ろに纏めた少女が腕組みをしていた。

「まあ、早く終わったからといって助けに来るわけないよねえ」

少女が緊張感の全くない声色で独り言を呟いている間に日比野は腕時計に仕込んである発信器のスイッチを押そうとする。

「こら、忍ちゃん！相手から注意をそらしちゃダメでしょ！」

日比野の後ろから声がする。忍と呼ばれた少女に注意しながら振り向くとノースリーブのシャツにジーンズを履き、眼鏡をかけた左のサイドポニーの少女がバットを構えていた。

「いやいや、ちゃんとコードネームで呼んでよ」

「でも忍ちゃんは忍ちゃんよね」

「うん…もういいよ。私もめんどくなつた」

「…あんたら、コントなら他の場所でやってくれないか」

あまりの緊張感の無さに呆れながらも二人の動きに注意しながら腕時計を操作して緊急事態であることを本部と樟葉に伝えることに成功し、自身も状況を打開するために動く。

「何にせよ、お前たちには少しの間、眠ってもらおうぞ」

「こっちは、か弱い女の子なんですから手加減してくださいね」

「いや、多分無理でしょ」

本気の敵意をぶつけても少女達は引くことをしない。それどころか構えをとって日比野と相對することを選んだ。

「まあ、私達だけでやれるならそれでいいんだけど」

忍はそこで言葉を切ると右手を挙げる。何事かと緊張する日比野がすぐに対応できるように腰を低くする。

「それは無理そうだからー手段は選ばないよ」

右手を降り下ろす。直後、日比野は背中に痛みを感じた。

何事かと思うと同時に急激に眠気が襲ってくる。

「くっ…」

気力を振り絞り、どうにか立つことは出来たが動くのはかなり無理がありそうだった。

「いやー、普通なら一発で即効で眠っちゃうんだけどタフだね」

瞼が重い。少女が何か言ってるが意味を理解するのが難しい。気付けばうつ伏せに倒れていたが体が全く動かない。

「ち…くしょ…う…」

どうにか一言だけ出せたが日比野はそこで力尽きてしまった。

「流石は杏ちゃんね」

「適材適所だよね。ところで葵姉さん」

「ん？何かしら？」

「確か葵姉さんは楓姉と待機のはずだよね」

「そうよ。それがどうしたの？」

「楓姉はどうしたのさ？」

「楓ちゃんはお姉ちゃんに酷い事を言っただからお仕置きしました」

「…大丈夫かなあ」

「大丈夫よ、楓ちゃんは私達より丈夫に造られてるから」

「うん…まあ、そうだけどさ」

双方思奸 6

亨は公園のベンチに座って携帯電話を耳に当てて話していた。

『少し予定が狂ったけど第一段階終了、亨の言う通りに樟葉が移動開始したよ』

「よし、今から俺も動く。くれぐれも無理はするなよ」

『了解、でも私達を頼ってもいいからね』

会話が終わり、ゆつくりと携帯電話をしまつと一度伸びをしてから辺りを見渡す。辺りに誰もいないことを確認すると

「悪役は悪役らしく振る舞いますか」

そう呟いて、公園を後にした。

忍は急いで着替えて亨に前もって指定されていた場所に向かっていた。

「全く、人使いが荒いよね」

さっきのこと自分じゃなくて楓を使えば良かったのではないかと思うがそれだと杏の狙撃の邪魔になるかもしれないという考えに至り、かといって葵に任せると何をするか分からないからあの状況なら自分が適任という結論になり、あの指示は的確だったと思うことにした。

そして樟葉と明確な交流があるのは自分だけだからと自分を納得させて目的地へ急ぐ。

クロは事務所で靖子と一緒にテレビを見ていた。

「……」

二人とも無言でテレビを見ているがクロは「靖子は退屈していないか」と考えていた。契約してから約三週間、靖子の性格を理解した

つもりでいる。しかしそれは他人に遠慮しているだけで仮面かもしれない。『自分は異質』と靖子は考えているのではないか。自分は勿論、亨達もそんなこと気にしないだろう。だから

「靖子、他の番組が見たかったら教えてくれ」

「……？」

突然のことに不思議がっているのか靖子がクロを見て首を傾げる。

「遠慮なんてする必要はないのだぞ。私は靖子が見たい番組が見たいのだから」

クロの言葉に頷き、そして少し間をあけて横に振った。

「この番組でいいのか？」

笑顔で頷く靖子にクロは満足そうに頷き返すと立ち上がり、応接間に入る。そこには黒い何かで簀巻きにされている根岸がいた。

「気分はどうだ、人間？」

「……今すぐ解放してケーキと紅茶を出して、帰してくれば良くなるわ」

「分かった」

「は？」

啞然とする根岸に即答したクロはすぐに拘束を解き、根岸が事態を飲み込むより早く部屋から出ていこうとする。

「ちよつと……」

「『もんぶらん』と『ていーぱつく』の紅茶でいいならすぐに出そう」

根岸が何か言う前にクロは冷蔵庫にある亨のモンブランを出すために部屋から出ていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2688i/>

生骸屍肉

2011年12月7日00時53分発行